

言語史の一面

石 井 久 雄

本誌の前号は、玉村文郎先生に、ご在職中の功績を記念して献呈された。多彩な論文が寄せられていて、本稿は、遅れ馳せながら、その驥尾に付したいと願うものである。

それとは別に、浅野敏彦氏および藤井俊博氏の尽力によって、玉村先生の古稀をお祝いする論文集が刊行され、私も参加する機会を与えられた。本稿で重複するところがあるが、文字にかかわることからは、記念論文集で立ち入り、本稿で省いた。

1 問題

標題は、「言語にかかわるこの一面の歴史は、言語史の一部を構成しないであろうか」とでもしたかったところである。それでは些か長いので、等価ではないと思いつながら、見られるように縮めた。「この一面の歴史」を日本語についてざっと浚ってみたいと思つた。

「この一面」というのは、「外面」と言い換えてよいかもされない。あるいは「これら諸側面」のほうがよいかもされない。

言語の歴史として記された書を繙くと、時期に区分して時期ごとに語彙・文体・文法・音韻・文字といった言語要素を述べるか、語彙史・文体史……といった言語要素の通史を輯めるか、している日本語についての書も、他の種類の言語についての書も、それが通常である。しかし、そればかりが言語の歴史の述べかたであるであろうか。

ここに描いてみようとして私が抱いているイメージは、実は私自身においても明瞭でない。なにか簡単な類例がないか、考えてみると、人のことに準えるならば、新聞の死亡記事であろうと思う。いつ生まれて、どのような事蹟を残し、どのように死んだか、あるいは葬儀をいつどこで行ったかといったことが、死亡記事に盛り込むべ

き内容である。しかし、言語については、生死とか事蹟とかがどのようなものであるか、判らない。語彙・文体……の変遷を辿ったからといって、事蹟を辿ったことにはならないであろう。

歴史の別の述べかたを私がなぜ試みようとしているのか、そのほうが問題であると、言語の研究者は考えるであろう。独り相撲であると批判するであろう。しかし、私の正直なところを言つと、語彙・文体……の述べかたに、余りおもしろみを感じない。

歴史と物語といつのは英語でも *history* と *story* とに言い分けるが、その英語二つは、十五世紀以前に、フランス語の一語から別の経路で入つたよつで、その元となつたフランス語は、現在の *histoire* に至るまで、歴史・物語双方を意味する。歴史を述べ、それを読むことには、本来、物語におけるように昂奮があつてよいと思つのである。

言語史の研究者として未熟であるから、これまでの述べかたに物語を感じるができないのだ、という批判は、甘受したい。しかも、私は、私が知ろつとしてゐることを、未だ殆ど知つてはいない。以下に僅かに触れるものも、従来の研究のなかに含まれ、それをへたに再編しようとしてゐるに過ぎないようでもある。新たな昂奮などないことも、認めなければならぬ。本稿は、そのような意味で、研究の成果ではなく、研究課題の提起である。

歴史ののべかたは、多様にあつてよいであろう。独り言語の歴史についてのみならず、たとえば文芸・芸能・音楽・美術の歴史についても、新たな描きかたを期待したい。

2 言語ないし日本語の生と死

言語の歴史にとつて、最大の事件は生まれることと死ぬことであるであろう。人をはじめとするさまざまな生物や自然にとつても、あるいは、人が創り出したさまざまな社会や制度にとつても、そうであるであろう。言語の歴史と言つたときの言語は、言語一般であつてもよいし、個別の言語であつてもよいし、方言でも個人語でもあつてよい。それぞれに、生まれるときがあつたはずであり、おそろく死ぬときがある。

しかし、個人語を除いては、生まれたことについて、いつ、どこで、どのように、といつたことを、述べ難い。日本語が生まれた様について、どのような源流があるかといつたことは議論されるが、誕生の時・所を特定することは、議論できる状態にはないようである。日本社会といつものがどのように成立したかといつことが、歴史のあるいは考古的に明らかにになれば、それをもって、日本語の誕生といつことはできるかもしれないが、それでも、そのときの日本語の姿は、分からないままであるであろう。実体が分からなくとも、存

在したということは言うことができる、それは言語の特徴であるかもしれない。

言語の死は、第一義としては、使い手がいなくなることを言い、第二義としては、生まれ変わることを言う。日本語の死については、第一義としても第二義としても、いま予想することができないが、過去を顧みて想像することができなくもなく、第二次世界大戦の後に日本の分割統治が行われ、日本語もそれぞれに生き始めていたならば、第二義における日本語の死はありえたであろう。

ラテン語は、もとは古代ローマの言語であった。イタリア語・スペイン語・フランス語・ルーマニア語などを生み出すとともに、ラテン語を第一言語とする人はいなくなつた。典型的な第二義の死である。しかも、ラテン語は、学習され、教会あるいは学問のなかで生き続けて、自らが生み出したものを含む近代ヨーロッパ諸言語のなかに、語彙的に取り入れられている。こうしたラテン語の姿に、サンスクリット語を重ねることもできる。死ということには、その後がどうなつたかという追跡も必要であることになる。

第一義における死は、個人語にあきらかであり、集団の言語についても、例えば方言の死といったものがありうる。いわゆる「方言がなくなる」事態は、俚言としての特徴が薄れることを指すのであるならば、方言の死ではなく、方言の時間的変遷に属する。俚言と

しての特徴が薄れて近隣の方言と一体化するならば、元の方言は、新たに広く統合される方言のうちにも、生まれ変わることになる。ならかの事情で集落が消滅するときに、その集落の方言は、纏まつたものとしての死を迎える。

3 複製ないし変種

誕生と死とが明らかでなくとも、言語の生きている姿はさまざまに見ることができる。歴史一般における常であるかもしれない。生と死とが歴史上の最大の事件であるとするならば、新たな生命を生み出すことは、それに次ぐ大事件であるであろう。文字に書き記されるようになったときに、言語はそれ自体に最も近い複製をもつことになった。この複製は、親である言語と関係しつつ、独自の歴史を形成するが、それについては省く。

ここで言語と言っているものは、日本語とか方言とか個人語とか言っているものすべてを含めて、口頭のものである。文字に書き記されたものは、ここでは言語のうちに含まれない。

言語は、人の手が入つた変種を生み出した。例えば詩。リズムあるいは韻を整え、様式を具える点で、通常の言語ではない。また例えば歌。詩に旋律を加えた。芸能・芸術の言語は、発声・発音に訓練を要する。演劇の科白は、観客席の隅にまで届くように、発声・

発音が工夫される。思考・感情など、普段は口に出さないでいることを、独白として声に出して、思考・感情などとはとの新しい関係を作り出しもした。また、NHKの二ニュースを初めとする、放送のことば。文体・語彙・発音といったところに、種類の制約を課している。

こうした変種は、文字がかかわる領域に属するよりは、音声の言語の領域に属していると言つてよい。発音が問題になるからである。リズム・韻・旋律は、明瞭に音声のものである。ただし、演劇や放送では、文字に記された脚本がある点で、文字の領域に相当に踏み込んでいる。このように挙げられる変種が、言語そのものであるとは言い難いことは、言い濼みや言い損ないを含まないことに、明らかである。

変種として、どのようなものをどのように生み出したか、それも言語の歴史を述べるに当たつて、彩りとなつてよい。生み出されたものは、それぞれに歴史をもつとしても、である。

音読というものも、言語の変種に挙げることができるであろう。文字で書き記されたものがあることが前提である点で、演劇や放送の言語に近いが、見たり聞いたりする受け取り手が意識されない点で、異なる。演劇や放送のものに比べて、むしろ、文字にかかわる一つのありかたであると考えられることもできる。黙読が意外に新しく

発生したということが、近ごろ言われていて、黙つて書き記すことも、意外に新しいことであることになるかもしれない。

4 言語の新しい様態

言語の変種のうちも含めてもよいかもしれないが、電話で行われる言語というものがある。電話を掛けているときに話し聞いていることば、きわめて日常的に行われている言語が、新しいありかたのものである。ありかたが新しいというのは、相手が見えないところにある。

言語のありかたは、基本的には、相手を目の前にして話し聞くものであり、表情や身振りが加わることによつて、伝達の用を果たすものである。ことばによる問い掛けに、ことばによらずに身振りのみによつて答えてもよく、それで話が先に進む。電話ではそういうことができなない。相手が見えないので、ことばのみによつてすべてのことを果たさなければならぬ。

相手を目の前にしない、したがつて話し聞かやりとりがない、という様態は、ラジオ放送で実現していた。電話の様態は、やりとりがある点で、本来の言語に近い。電話の出現によつて、言語は、言語のみによつて自律的に完結することになった。もとより、二人の間に衝突があるようならば、言語は言語のみで完結することを求

められてきたが、それらは例外的である。電話の普及、特に携帯電話の普及は、自律的な言語を日常化してしまつた。

自律的な言語といったものは、文字言語では通例であつたが、言語においてもその状態が確立することになつた。言語のありかたは、ここまでに触れなかつたテレビ放送まで加えるならば、次のようになるであらう。

	相手が見える	相手が見えない
やりとりがある	本来の言語	電話
やりとりがない	テレビ放送	ラジオ放送

備考 テレビ放送では聞き手の姿が話し手に見えない。

電話あるいは放送の言語は、工学技術に支えられて現れ、道具を必要とする点で、嚮に挙げた言語の変種と異なる。嚮の言語の変種は、道具を必要としない。言語のありかたが、工学技術などの発達に伴つて展開することを、考えてよいと思われる。合成音声というもののできて、表面的には、言語を発するのが人間のみではなくなつたこと、それも考え併せてよいであらう。

なお、工学技術は、言語の新しい状態を確立したのみではない。放送は、言語にとっては、方言を衰退に向かわせる要因となりがちであり、別の言いかたをするならば、一言語の統合を強めることに

なる。言語の歴史の大きい潮流にもかかわる。

言語が自律的に完結しうることになり、元はともあつた表情や身振りなどのような影響を被つたか、それも解明すべき課題であるが、どのようなものであるか、いま、見当も付かない。

5 日本語とはなにか

言語の生死と言い、あるいは変種・新状態の産出と云つて、言語を例えば日本語とするとき、その言語・日本語の範囲を定めなければならぬ。個体の生死はイメージすることが楽であるが、日本語という抽象的で複合的であるものを厳密に定義することは、容易でない。源氏物語の言語と私の言語とを、なぜとも日本語と言つてよいか、実体が明らかでない聖徳太子の言語を、なぜ日本語と言いつるか、あるいはいま互いに隣に座っている人同士の言語がなぜとも日本語であるのか、それを確証する術がない。

ただ、あなたのことばと私のことばとが同じであるか違つかということは、通ずるかいなかによつて、簡単に判断することができる。いろいろと違つところがあるけれども同じことばであるらしいとか、似ているけれども違つらしいとか、そのような判断もできる。私とあなたとは同じ、あなたとあの人とは同じ、そのようにこの判断を積み重ねることによつて、一言語を定めることができる。空間上も

時間上もその積み重ねができる。途中は信念あるいは想像に過ぎなくなるとしても、青森の言語と鹿児島島の言語とは繋がり、私のことばと万葉集の見も知らぬ人のことばとも繋がる。判断を積み重ねるなかでの一点が日本語と称すべきものであるならば、その全体が日本語であるとしてもよい。この判断に、たとえば政治的な要因が絡むことは、当然である。政治的な要因は、言語の生死にもかかわっているからである。

このような判断を積み重ねることが、一言語を定める唯一の方法であるかもしれない。語彙・文法・音韻などによって言語を定めることは、きわめて困難である。なにかの規準を設けても、言語が変化して、大抵はその規準を覆ってしまうからである。しかし、変化することを規準として、言語を定めることはできるかもしれない。日本語とは、日本語の変化が伝播する範囲の言語である、というようにである。言語が伝播すると規定すると、借用との分別が難しくなるが、借用表現には元の言語の変化が及ばないのが通常であるので、変化が伝播すると規定すると、借用を切り離すことができる。日本語とはなにかという問題を、別の面から考えることもできる。日本語は、恐らく、日本語でない言語と対比されて、一言語と認識されてきたであろう。すなわち、日本語の周囲にはどのような日本語があり、そのなかで、日本語は、どのように他の言語でなかった

か、そういう問いかたをすることもできる。ただし、日本語のばあいには、日本語とよく似ているものがないので、おもしろい問い掛けにはならないかもしれない。日本語は、アイヌ語・朝鮮語と隣り合ってきていて、それが特に古代においては、直接の対比の対象となっていたと考えられる。

そうして、漢語（中国語）である。日本の国家制度が漢（中国）を見做って成立して、日本語も甚大な影響を受けてきている。日本語の深い認識も、漢学の影響によるところが大きくある。中世以降には、ヨーロッパ諸言語との接触があり、特に近代・現代においては、英語・米語の圧倒的な影響を受けている。近ごろの若い歌手の歌によく見られるように、米語の表現を併存させる形で日本語の表現を完結させることがあり、その基には、日本語と米語との対比があるであろう。

言語の認識の歴史、あるいは日本語の自覚の歴史、といったものについても、また、どのように描くかという問題を提起することができる。言語そのものの歴史とは離れるので、今は立ち入らない。

6 他の言語とのかかわり

言語は、周辺あるいは遠隔の言語とどのようにかかわってきたか。日本語が他の言語とどのようにかかわってきたか。それも言語ある

いは日本語の歴史の一面ではある。

日本語がアイヌ語や朝鮮語と嘗てもかかわっていたことは、想像に難くない。古く漢語に影響を深く受け、新しく英語に影響を受けていることは、周知である。影響を受けるといふのは、端的にはその言語を学んで使い、また語彙を借用することである。いま認識を繞つて触れたばかりでもあるが、他言語と併存する日本語、他言語を吸収する日本語、そういうた姿を描くことも必要である。文字のうえでとらえるのが適切であろうが、日本は、訓読という、原文に密着した翻訳の様式を發明した。世界に類を見ない様式であると考えられる。

日本語は他の言語に影響を与えたか。それは殆どないと言ってよいであろう。そうした影響関係も、歴史を描くうえで抑えるべきこととがらになる。

日本語は、現在、ほとんど日本列島の上に存在し、歴史的に見てもそうであつたであろう。それならば、日本列島の上で、日本語はどのような他言語と共存しているか、そのような問も無駄ではない。現在は、世界各国の大使館・領事館があり、それぞれにその国の言語を用いているであろう。つまり多様な言語がある。使用人口が最多の他言語は、米軍基地の米語であるかもしれない。日本列島の上の言語の多様性も使用人口の多さも、ここ数十年のころのこととて

あると見られる。

ある言語が、他の言語に対して、直接にはかかわらなくとも、どのような地位にあつたか。そのように問うこともできる。全世界にどれくらいの人がいいて、そのうちのどれくらいがその言語を使っているか、ということである。現在では、全世界の人口が約六十億、日本の人口が一億と少しであるから、大体五十分の一から六十分の一くらいが、日本語を日常的に使っていることになる。言語や人口をどのようにとらえるか、という問題をさておくとする、日常的に使われる言語として、日本語は世界十位くらいにあるようである。歴史的には、推計が難しいが、日本列島のうえの人口は、紀元後、大体、世界の人口の二パーセント前後を推移してきたというところではないかと思われる。

世界における言語の地位ということでは、第二言語としてその言語を学び使う人が、どこに、どのくらいいるかということも、問うべきである。現在、日本の外で日本語を学んで使っている人は、世界に広くわたつているが、世界の人口の一万分の一に達するかどうか。ただ、歴史的には、日本語が世界に拡がったのは、ここ数十年の急速なことであるとして、間違いないであろう。

7 話し聞く環境・主題

言語を話し聞いているところを、想像したい。だが、だれに向かつて、何を話しているか。どのような調子で、どのような格好で話し、聞いているか。

古代と現代との違いは、口の側よりは、耳の側で大きいと思われる。人の耳には、話し聞いているときでも、ことばのみが入ってくるわけではない。古代においては自然音があつたであろうし、現代においては、それに加えて、集会や工事の音があり、また電気製品や自動車などの音がある。そうしたもののなかから、ことばが選り出されて聞き取られる。ことばは、つまり、環境が出す音とかがわりながら、生命を保っている。酷い騒音のなかでは、ことばを発することが避けられることになる。

よく話をする人はどのような人であるか。話を聞くのはどのような人であるか。どのような姿勢をして、話し聞くか。何について話し聞くか。そのようなことは、現代についても分かつていない。古代についてはなおさら分らない。それでも、いま、饒舌な人がいるし、無口な人がいる。話すときに、饒舌な人は早く、無口な人はゆっくりと、というようなことも、あるかもしれない。

現代は、書き読むという行為があるが、古代では、ことばにかか

わる行為は話し聞くことに大きく傾いていたであろう。現代では、書き読む時間のために、話し聞く時間が割かれているかもしれないが、古代では、どのくらいの時間、話し聞いていたか。

人に関心をもつと、名も知れない人のことが気になる。例えば、西暦八百年ころに丹波に住んでいた或る一人は、親などからどのような言語を引き継ぎ、どのような生活を送って、子孫にどのような言語を伝えたか。その四百年後、子孫はどのように広がり、それだけの言語あるいはそのうちの一人の言語はどのようにであるか。さらにその四百年後、また現代へと、どのように言語がとらえられるか。具体的に人をイメージしながら、その言語を復元することができるかもしれない。そのような歴史の描きかたもあるであろう。

8 終わりに

以上に述べたことは、これまで、例えば語彙史・音韻史の一部として語られ、あるいは言語行動史・言語生活史という枠で語られてきたことであるかもしれない。言語の現在の研究にとつて、語彙や音韻は言語を構成する領域にあり、言語行動や言語生活は言語そのものではない、ということにもなる。しかしながら、言語行動・言語生活など言語を取り囲むものが、言語そのものを変えもする、ということ認識するならば、周辺を包み込んだ言語の歴史、という

捉えかたもあってよい。

日本語は、一千五百年以上の歴史をもって現在に至っている。日本列島の上で、世界の人口の二パーセント前後が日常的に使い、最近は国際性ももつようになってきた。歴史のなかで、和歌や演劇におけるように、人為的な工夫を加えたものや、電話におけるように、自律的に完結する言語を生み出した。古代は自然音に囲まれ、現代は機械の騒音と闘いながら、だが、なにを、どんな姿勢で話し聞いてきたか。

言語の歴史の描きかたとして、そのようなものもあってよいのではなからうか、ということを書いた。

注

本稿は、二〇〇一年六月一七日の同志社大学国文学会研究発表会で述べたことである。内容には、基本的には増減がない。論文としての体裁を整えることも考えたが、本文・注釈の様式も発表時のままとする。注釈とすることは、発表本では触れず、配布資料に記すにとどめていた。参考書目も、注釈に言及することだったので、煩を避けて一覧を省略した。

【一注】

日本語の歴史について、従来の述べかたに不足を訴え、新しい試みをしたものがある。それはここに記すべきであるが、最後に紹介する。歴史の述べかた、あるいは歴史と物語との関係、といったことは、歴

史学の重要な課題であり、また哲学にもかかわるところがある。次は、翻訳においてであるが、書名に「歴史」「物語」、双方の語を含む。タント、アーサー Danto, Arthur C.

(1965) Analytical Philosophy of History.

＝ (1989) 物語としての歴史——歴史の分析哲学。

河本英夫訳、国文社。

歴史についての書名に、「物語」を冠したものもある。

笠原 一男 (1991—1997) 物語日本の歴史 全二十八巻、木耳社。

猿谷 要 (1991) 物語アメリカの歴史。中公新書。

中公新書。物語……の歴史」はシリーズ化している。

物語にとつての歴史を論じた文学論もある。

兵藤 裕己 (1995) 太平記「よみ」の可能性——歴史という物語。

講談社選書メチエ。

英語の 'history' および 'story' の語源について。

寺沢 芳雄 (1997) 英語語源辞典。研究社。

に、次のような記述がある。記号を書き改めたり解説を適当に省いたりする。

「history 古期フランス語 *histoire* または *estoire* またはラテン語 *historia* を借用して中期英語の *histori(e)* または *histori(e)s* story と二重語で、中期英語では両者の間に意味の区別はなかった。古期英語 *stær* は古期アイルランド語 *stær* を經由してラテン語から借用したものである。」 (p. 657)

「story アングロフランス語 *estorie* を借用して中期英語の *storie*。estorie は、ラテン語 *historia* を借用した古期フランス語 *estoire* (現代フランス語 *histoire*) に対応する。中期英語では *history* と区別なく用いられた。」 (p. 1367)

【2注】

ここで述べているようなことは、最近考え始めたものである。

石井 久雄 (2000) 言語はどのように歴史を形づくるか。

武蔵大学人文学会雑誌 31, 3, pp. 121-126。

歴史を描くのに、起こらなかった事件、起こっていない事件、知られていない事件は、対象とならないが、起こりえた事件、起こりうる事件は、念頭においてよいように思う。それとの対比で、実際に起こった事件の意味合いも、脹らみをもって捉えることができるようになる。

【3注】

フランスの歴史学、特にロジェ＝シャルチエを中心とする最近のアンール学派で、読書の研究が進められ、黙読の発生が注目されている。それにも触れながら、日本における黙読がどのように生じてきたか、概説を行ったものがある。

宮島 達夫 (1996) 黙読の一般化——言語生活史の対照。

京都橘女子大学研究紀要 23, pp. 1-16。

【5注】

一言語というものがどのように規定されるか、その言語地理学的な理解として、かつて一言したことがある。

石井 久雄 (1997) 言語伝播領域の考。

＝加藤正信 (1997) pp. 590-578。

加藤 正信 (1997) 日本語の歴史地理構造。明治書院。

【6注】

古代において、日本人がどのように他言語を学び使っていたか、最近研究がまとめられている。

湯沢 質幸 (2001) 古代日本人と外国語

——源氏・道真・円仁・通訳・渤海・大学寮。

勉強出版。

日本語が他言語からどのように借用しているか、特に漢語からのものについては

山田 孝雄 (1966) 国語の中に於ける漢語の研究。宝文館出版。

を初めとして研究が多い。ヨーロッパ諸言語からの借用については、最近、次が現れた。

石綿 敏雄 (2001) 外来語の総合的研究。東京堂出版。

この書の末尾は、英語がどのような借用をしたか、および世界の諸言語にどのように借用されているか、ということを取扱っている。

日本語から世界の諸言語に借用された語をめぐっては、日本文化論を展開することもできる。

加藤 秀俊・熊倉 功夫

(1999) 外国語になった日本語の事典。岩波書店

日本を理解するためのキーとして日本語が取り上げられているうちは、日本文化が特殊であるとまだ世界に思われているということである。日本ないし日本語が本格的に国際化したときには、あたりまえの語が、日本性を払拭されて、諸言語に借用されることになるであろう。

ところで、日本は、第二次世界大戦終了までは近隣諸国に侵出していた。日本語も教育されていて、その実情が纏められている。

河村 湊 (1994) 海を渡った日本語——植民地の「国語」の時間。青土社。

英語が世界に進出していったことに、私は羨望を感じる。その羨望はあるテレビ番組から出たものであり、その番組は一書としても纏められている。

マクラム ロバート McCrum, Robert.

クラム、ウィリアム Cran, William.

マクニール、ロバート MacNeil, Robert

(1986) The Story of English.

(1989) 英語物語。岩崎春雄ほか訳、文芸春秋。

日本語人口は日本の人口と同一視し、人口の歴史は、

速水 融(1997) 歴史人口学の世界。岩波セミナーブックス。

に紹介されている数値による。

西暦一〇〇〇年 世界 二億六五〇〇万 日本 四五〇万

一五〇〇年 四億二五〇〇万 一七〇〇万

一七〇〇年 六億一〇〇〇万 二九〇〇万

一九〇〇年 一六億二五〇〇万 四五〇〇万

一九七五年 三九億 万 一億一〇〇〇万

古代日本についての推定などは多めの数値であるとのことであるが、世界のなかの比率として見れば大して外れていないであろうと思われる。

【8注】

ここに記したような意図をもって歴史に向かったものは、すでにある。

佐藤喜代治・前田 富祺

(1977) 国語史要説。朝倉書店。

この書では、日本語の歴史を上代・中古・中世・近世・近代・現代の六時代に区分し、上代から近代までの五時代はそれぞれ三節で構成する。

一 言語 二 話し聞く生活 三 書き読む生活

第二節・第三節が特徴的であり、それについて序文も触れている。

「本書においては、必ずしも日本語の歴史の全体について史実を網羅的に述べることを目的とせず、むしろ、生き生きとした日本語の歴史を述べることを考えた。言語は使われることによって初めて生きたものとなる。そこで、体系を考える上では問題もあり、言語の枠を越えるところもあるが、いわゆる言語の事実のほかに、話し聞く

生活、読み書く生活を別立てとし、言語の実際に使われている場面を重視することとした。」(前付p.1)

このことは、第一章「総説」第一節「国語の歴史」(pp.1-6)に詳しく述べられている。著者はともに私にとって直接の師であり、その強い影響下に私の考えがある。本稿に述べたことは、そこに一二なにかを付け加えようというだけに過ぎないようである。

投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場であり、進んでご投稿ください。枚数は四百字詰三十枚以内。第五十七号の締切は二〇〇二年九月末日、第五十八号の締切は二月一〇日厳守。ただし、掲載数には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任してください。採否の問合せには応じられません。